

第6回日米合同セミナーの報告

第6回目を迎えた今年の日米合同セミナーでは、持続可能なコミュニティと社会—「グリーン経済」の探求—をテーマに掲げ、3日間（2006年6月9, 10, 11日）にわたって、開催しました。開催地は、一昨年と同じくハワイ州ホノルル市内オハナ・イーストホテル。梅雨空の東京を離れ、晴天のハワイの空の下、気分爽快、フィールドトリップと活発なディスカッションを行いました。

【1日目】フィールドトリップ

今回のフィールドトリップでは、オアフ島のワイアルアというところにあるパイオニア・ハイ・ブリード・インターナショナル社と、ワイマナロという地域にあるナロファームを見学した。

両者ともに、日本以上に自給率の低いハワイにおいて、少しでも耕地を有効に活用し、農業を再生しようという試みである。

前者は、比較的大規模の畑で土壌中の窒素とリンを減らす間作を行い、とうもろこし栽培等の事業に取り組む農場であった。後者は小規模ながら、作物をブランド化することにより、いわゆるニッチを築いている農場であった。

パイオニア社では間作の取り組みそのものと、それにより得られた効果について説明を受けたが、種蒔き前の時点と間作で植えた草のすき倒しを終えた時点での、窒素とリンのレベルを比較すると、その量は大麦で窒素は1エーカー当たり175.4から407.4Ib、リンは同12.5~38.1Ib減少し、オート麦では1エーカー当たり窒素が224.2~524.1Ib、リンが14.5~56.6Ib減少したとのことであった。また除草剤も不要となり、それらを考慮すると間作を行わない場合に比べ82%ほどのコストで事業展開が可能とのことであった。

まだまだ開発段階でこれから大きな敷地を開発するという雰囲気ではあったが、同社はハワイにおける食料自給率向上に留まらず、栽培した作物の輸出を狙う農場であった。連邦政府から受けている補助が経営を成り立たせる上での重要なものようであったが、除草剤不使用による開発に加え、地元の高校生をインターンシップを活用して受入れ、農作業体験を通じたハワイの食料自給に関する教育も行っている。若い人々の農業離れが

深刻なことから、何とかして若者が従事できるよう将来を見据えた産業育成に取り組む企業と思われた。

ナロファームでは日系人経営者ならではのセンスと交配技術を合わせて、わさび味の水菜や甘いもやし、レモン味のハーブ等を開発、栽培しハワイの多くの有名レストランに納めている。

わさび味の作物が印象的であったが、日系人が人口の約17%を占め、日本人観光客は年間約150万人にもものぼるハワイにおいて、日本的な味のする作物が栽培され事業化されていることは納得のいくものであった。そうでなくとも、日本においてイタリア料理や韓国料理が人気を博しているように、現地では異国情緒溢れる香辛料とも言えるわさびの味が好まれても不思議ではない。

農場そのものは大規模な経営がなされている様子ではないものの、適切な規模で付加価値を高めたビジネスを行っているように思えた。異国の雰囲気や何か新しいもので楽しませることが、ビジネスにおいてはひとつの武器になり、その出所となる他では真似を出来ない技術を持っていることで、ハワイの観光ビジネスを支える外食産業の一端を担う農業においては、ニッチを築くに値する要素が備わっているように感じた。

上記の二つの農場を訪問する間、昼食を採る場所としてホノルル市のココカヒ湾にあるYWCAにも立ち寄った。



青々と茂る水菜畑



わさび味の水菜

ここでは特にハワイ固有の文化や自然の保全活動を行っているとのことであった。説明者のシェリルさんは、東海岸の方で学生生活を送られていたが、地元であるハワイの自然保護に資することをしたいと考え、帰郷しYWCAにて活動をリードするようになったとのことであった。

観光地としてしか捉えたことのなかったハワイに出向くことで、若い労働力が必要な中で観光以外の産業成長のために尽力する人々や、市場を見極めて技術革新に励む人、また故郷の自然を保全するためにひたむきに活動を推進する人に会うことが出来たことは貴重な体験であった。ある意味似た状況にある日本の民間企業に身を置く人間としてはビジネスの形で、今回の旅で考えたなすべきことを実践していきたい。

[報告:島田康弘/(株)市川環境エンジニアリング]

【2・3日目】

持続可能なコミュニティと社会

—「グリーン経済」の探求—



テーマ1:「食ること(食と農)」の視点から

日本とハワイの農業は遊休農地の保全と後継者育成が共通課題

6月10日午前の「食と農」に関するセッションは、ジョン・マクヒューさんの「土壌保全：ハワイにおける持続可能な農業の鍵」という発表から始まった。ハワイでは過去150年にわたって砂糖とパイナップルのプランテーション農業が農地の大半を占めていた。しかし、1980年代からそれらの産業は東南アジアなどの海外に移転していき、オアフ島からは1996年を最後に砂糖農場は消滅した。それ以降、農業の多様化を目指して野菜栽培やヒマワリ栽培も行われてきたが、それらは砂糖やパイナップルほどの土地を必要とせず、大量の農地が遊休化した。裸地化した遊休農地からは土壌が流出していくが、それは観光や住宅開発などにも深刻な影響を与える。このためハワイでは遊休農地の管理が課題となり、土壌・水保全地区(SWCD: Soil and Water Conservation District)を指定して土壌流出の防止に取り組んでいる。ジョンさんはオアフ西SWCDの担当者である。土壌流出の防止策としてはまず被覆作物を植えることが重要で、これまでは被覆作物の選定、品種改良などの技術開発を進めてきた。

今後はそれを農家に広めていくことが課題で、そのための保全計画が作成されている。しかし、多様化した新しい農業は小規模のためオアフ西

SWCDだけでも80の保全計画が必要とされる。これまでSWCDの活動はジョンさんも含めてボランティアが支えてきたが、1つの保全計画の処理に1ヶ月かかり、もはやボランティアだけでは対応できなくなっている。

次に“Agricultural Leadership Foundation of

Hawaii”のジョアナ・ナカタさんより、次世代農業リーダーの育成に関する話があった。“La Dolce Vita”（甘い生活）という名画のタイトルから始まったイタリア（シチリア）系の血を引くジョアナさんの話は、グローバリゼーション、相互依存、システム思考、リーダーシップ、スローフード、持続可能社会、創造、不安定化をキーワードに進められた。今、ハワイの農業コミュニティにとって一番重要なのは次世代のリーダーを育てることで、それには腹をくくってかかる必要がある。リーダーシップとともに女性に力をつけることも重要とのことであった。また、ジョアナさんは、グローバリゼーションには不安定化を招く面があることを指摘していた。

次に私（荒田）が、環境文明21のグリーン経済のための「食べる」ことからの提言を紹介し、続いて日本における自立分散型地域社会作りの成功例として、休耕田で菜の花を栽培して菜種油を生産し、その廃食用油からBDF（Bio diesel fuel）を生産する「菜の花プロジェクト」の取り組みを紹介した。勤務先の吉備国際大学でも食堂の廃食用油のBDF化を進めており、この進捗状況も報告した。

[報告：荒田鉄二／吉備国際大学]

テーマ2：「働くこと（働き方）」の視点から

2日目午後は「働き方」をテーマに、ハワイ側、日本側からのプレゼンが行われた。最初に労働環境における心理面での専門家ドナルド・コフ氏が、アメリカ人の多くが仕事上ストレスを感じているというデータを示し、解決のための取組み事例を紹介した。ある企業は健康を害した従業員に地域貢献の場を与えることで健康管理を行い、ある企業は朝食サービスを行うことで従業員の健康管理と共に客層を増やしているという。またある企業はボーナスとは別に利益を分け合うことで働く意欲を掻き立てているという。いずれの場合も健康的な職場作りのポイントは、①予防、②教育・ト

レーニングへの投資、③仕事ぶりを認めることであり、特に予防こそが「経費の節約」に繋がるという考え方のもと、従業員の健康管理のために様々な予防策を講じることを企業に推奨しているという。

次いで私自身、グリーン経済で働き方を取り上げた理由や、日本人の働き方の特長として、①働くことの意義を見失い収入のためだけに働く人が増えている、②働く場や働き方の多様性が失われている、③長時間労働が子供に多くの犠牲を強いている等をデータも示しながら説明した。そして持続性の観点からみて現在の日本人の働き方は、資源の浪費や生態系の破壊を招いていること、金が全ての価値観が子供にも蔓延し働くことの喜びや誇りが失われていること、さらに子供や家族と過ごす時間を減少させていることや、地域活動やボランティア活動など経済性の低い労働が軽視されていることなど、様々な課題を含んでいることを紹介した。

ドナルド氏の提案が健康管理をビジネスとしてとらえていたのに対して、日本側からの提案は精神性や社会性も含めた働き方の根源的な内容であったためハワイ側参加者にはとても新鮮だったようだ。同時に、確かに何事も効率やMoneyで評価するアメリカ人を説得するには「健康管理することが経費の節約」と言うのが効果的であることは理解できるが、果たしてそれだけで本当に心身の健康管理が出来るのか、持続可能な働き方が実現するのか、少し疑問に思ったことも事実である。また、このセッションだけでなくセミナー全体で感じたことだが、ハワイ側の提案者は自分の発表が終わると直に退席してしまい、「他から学ぶ」という謙虚さのようなものが失われているように感じた。これではアメリカ社会の持続性は危うい、そんな感想を数人の日本側参加者がもったことは事実である。

なお、この日は、ハワイ大学を持続可能な大学にするための活動について、同大学センターのリングさんから紹介があった。

[報告：藤村コノエ]



テーマ3：「買うこと（グローバル経済下での地域経済）」の視点から

ハワイセミナー最終日は、「買う（グローバル経済下での地域経済）」の視点からの報告が3件ありました。最初のスピーカーは、ハワイ銀行副頭取でチーフエコノミスト、かつハワイの税收協議会会長も務めるポール・ブルーベイカーさん。ポールさんのお父さん、おじいさんと今回フィールドトリップで私たちが訪れたパイオニア・シード・カンパニーのエピソードが語られた後、スライドにいきなり数式が現れました。脳みそが拒絶反応を起こしそうでしたが、自然資源量（ストック）と人間による収穫量（フロー）の持続可能なバランスについてグラフでわかりやすく説明してくださいました。生活水準が上がると消費がのびますが、それが資源の量に見合うかどうかかが問題です。このような理論的なカーブを知っておき、現実にあてはめて考えることは私たちの消費を持続可能に維持するために重要だと思いました。

2番目のスピーカーは、アメリカの最古・最大の環境保護団体シエラクラブのハワイ所長、ジェフリー・ミクリナさん。ハワイの生態系や生活がいかに変化したが、具体的に図や写真で紹介されました。外来種、ごみ、水、電力、自然破壊など、ハワイの経済や観光業の発展の背後には問題が山積みですが、マネジメントやマーケットシステムの改良で問題解決の糸口は見えてきそうです。ハワイで1年に10億以上出る空びんや空缶が、これまでは25%しか回収できなかったのが、新たに5セントのデポジットによって回収率が80%まで

上昇しました。

3番目のスピーカーは筆者。グリーン経済部会で出した「買う」に関する提言7と提言8について、なぜそのような提言が必要なのか、具体例をまじえながらお話ししました。提言7は「買物が地域や世界の環境と暮らしに影響を与えることを意識した賢い生活者になろう。」というのですが、これについてポールさんから「市場経済」の視点が欠けているという指摘がありました。学ぶだけではなく、それを超えて環境を破壊するコストを経済の中に入れ込むシステムを導入することなどが必要との意見です。それに対して、加藤代表から提言10「地球環境時代に相応しい税・排出量取引制度などの経済的手法を活用しよう」が、その指摘に当たる部分だという説明がなされました。個人の消費行動、経済的な手法、どちらも「買う」ことからグリーン経済を作っていくため必要なことだと思います。ただ、これまでの議論が「経済」より「環境」をかなり重視してきたかな、という感はぬぐえません。次期は、経済よりの視点からもグリーン経済を考え、環境に負荷を与えることで発生する外部コスト等についてより深く調べてみたいと思っています。

[報告:工藤泰子/(財)日本気象協会]

セミナーを通じて

1. 幸せな日々・・・ハワイ

「循環型社会推進国民会議」ここが、私の出身地です。ここで私を育ててくれた懐かしい恩師のハワイセミナーの案内が届いた時、私は大ボカ・・・の失敗ばかり続く異常事態にありました。これが自分の限界と自問自答している中で、一度も参加したことのないハワイセミナーが気になりました。加藤先生が「楽しいよ」って・・・ここで行かなかったらもう機会がないかも・・・このような思考回路で申込みをしました。

「命の洗濯」という言葉がぴったりのハワイがあり、ここで朝から夕方まで環境という共通言語

で議論をしている。ギブアップしそうになるが、難しい話の向こうに深くうなずくモノを感じる自分があり、もっと聞きたいと思いました。参加者は、存在そのものがハンサムな女性実業家、これまでみた事のない次元を超えた社長さん、おしどり環境夫妻、侍みたいなのハーバード出身のジミー、歩く学者さん、湖のように深く優しいまなざしの指導者スーザン、英語でシャベラナイトのコノエさん、ジュゴンの守人兼大和撫子さん、知識の宝庫後藤先生など、始めてお目にかかる方も多かったののうちとけて皆さんから刺激をうけました。太刀打ちできなかつた巨大なお弁当が今でも目に焼き付いていますが・・環境に働く者にとって、この上ない幸せな充実した日々になりました。

帰宅したら速達が。高齢者団体から、高齢者が昔、身に備えていた知恵が、今、役にたつのでは。各団体が手を携えて環境に立ち上がろう・・という。そうなんです。環境とはシニアもミドルも青年もないのです。一緒に、持続可能で美しい地球を次世代に引き継ぐことなんです。ハワイに行けばそれがわかりますよ。そうです。皆さんもハワイ会議でスタートされたらいかがです。そうぶつぶつ唱えながら切手をかき集めて、速達でお返事。

我が家の「妖怪」こと、87歳の母親も、6匹のネコちゃんを預けられてくれたといたいいながら、お化粧してスカイブルーとピンクのアロハを日替わりで身につけて、流石ハワイのモノは違ってますって・・。2年後迄、大切に着てくださいね。

[報告:堤恵美子/(株)タケエイ]

2. ハワイセミナーに学ぶ

セミナーへの参加は1996年の第1回セミナー以来、2回目の出席である。10年振りのハワイはやはり空と海の青さ、山の濃い緑が印象に残る。

初日は、楽しみの一つであるフィールドトリップ。日本人には観光地やリゾート、ワイキキの印象が強いオアフ島だが、このツアーは島内ではどのような農業が行われているのか、農業経営では

どのような課題があるかについて、現場を訪問して営農者から直接話を聞く内容である。興味深かったのは、ここハワイでも急速に農業栽培の転換が進んでいることだ。かつて中心であったパイナップル栽培はタイやフィリピンに、サトウキビ栽培はブラジルに移り、その結果各地に耕作放棄地が生じて土壌流出の事態を招いているという。これに対して、最初の視察地では、土壌流出防止用のカバークropp (cover crop) と呼ばれる作物栽培のフィールド研究を行っていた。土壌侵食は、植物の生育に必要な微生物生態系を失い、地盤崩壊を招き、流出先では河川や海域の水質汚濁を生じる。豊潤な気候に恵まれ、豊かな農業を有すると考えていたハワイの農業も、グローバリズムの進展の中で環境面に大きな脆弱さを生じていることに気づかされた。

2日目と3日目は、持続可能なコミュニティ・地域社会の形成をテーマに、ハワイからのNPO (シェラクラブ・ハワイ代表、農業リーダーシップ会長等) やエコノミストと、日本からの参加者を交えて報告と討議を行った。いずれの報告者もよくコーディネートされており、事前準備の行き届いたプレゼンテーションであった。その中でハワイ側の報告を聞きつつ、特に日本の「グリーン経済を成り立たせるための10の提言」に基づく「食べること」「買うこと」「働くこと」の報告は、大変説得力のある内容に感じられた。それは、提言内容が国境を越えて多くの人々(とりわけ先進国)に共通する理念・倫理を提示するとともに、とくに日本人の生き方・暮らし方を想定した具体的な行動規範を含むものとなっているからであろう。

「グリーン経済の実現」は世界各国に共通する普遍的な課題であるが、環境文明21からの提言はまさに国際的にも十分通用する水準である。むしろ、世界に向けて積極的に発信すべき内容といってもよい。そのことを改めて認識した今回のハワイセミナーであった。

[報告:田中充/法政大学]